

ライフイベント（出産・育児）が勤労女性に及ぼす影響 －出産・育児が勤労女性にもたらすメリットについて－

The Effect of the Life Event (labor, child-rearing) on Working Women -Do Labor or Child-rearing Give Many Demerits to Working Women?-

鈴木 由美, 石井 貴子, 蓼沼 由紀子

要 約

これまで、出産・育児などのライフイベントが勤労女性に不利であること結論づけた文献は多く見られた。しかし出産・育児を経験することで得られるものの報告もあり、勤労女性にとっても何らかのメリットがあるものと考えた。今回の調査では、出産・育児経験者の看護職では、出産・育児のメリットとして、対人的な要素について認めていた。

対人的な要素のほか、時間の効率の良さ、常識的であること、などのメリットを挙げていた。仕事における自己実現については、出産・育児経験者、未経験者ともに周囲の協力、努力などを挙げていた。また、仕事における理解については、出産・育児経験者は「理解されること」であり、未経験者は「ねぎらうこと」が望ましいと考えていた。

キーワード：勤労女性、出産・育児、メリット、デメリット

緒 言

日本では合計特殊出生率1.29が2年連続しており、少子化問題は深刻になる一方である。女性が結婚しない自由、出産をしない自由について、価値観の変容、および社会的に容認される傾向が年々強くなり、また女性の労働の目的もこれまでの経済的な目的や余暇時間の活用から、仕事に生きがいを感じる傾向が強くなった。その背景に高学歴化によって、女性の職業の選択範囲が広がり、一生を通じて従事できる仕事が多くなってきたと思われる。概して、仕事にウエイトを置く生き方も珍しくなくなってきた。特に専門職に従事する女性にとっては、仕事にウエイトを置いた生活も予想される。これまではライフイベントによって、勤労女性にとって負荷がかかることだけがクローズアップされてきたが、メリットについては扱われる機会が少なかったといえる。少子化社会において、女性が結婚しない自由が尊重されることは当然であるが、多くの報告にもあるように¹⁾一般的に結婚し、出産・育児を経験することはメリットがあるように、勤労女性にと

ってもメリットがあるのではないかと疑問をもった。

しかし勤労女性はそれらのメリットを認めながら、時間的、物理的、体力的な制約の中で仕事と出産・育児を両立することを優先しているものと仮定した。

そこで今回、専門職である看護職（看護師、助産師）を対象にライフイベントの中でも出産・育児のメリットについて焦点を絞り、アンケート調査を行ったので報告する。

研究目的、方法

目的：専門職に従事する勤労女性の出産、育児の捉え方について知る。特にメリットについて追求し、勤労への影響を知る。

方法：自己記入式質問用紙を施設に配布を依頼し、留め置き法で2週間後に回収。

調査内容はライフイベント（出産・育児）がもたらすメリットを中心に、育児経験があったらよいと思われるもの、仕事への良い影響、仕事が生活に及ぼす良い影響、出産・育児経験があったらよいと思われる職業、自己実現と出産・育児の経験との関係、社会的な

評価などについての質問16項目。

質問内容については心理尺度ファイル、花沢成一「母性心理学」などを参考に出産、育児などのメリットになりうる項目を対人的、対社会的なものと自分自身に関するメリットを抽出し、それを複数の研究者が検討し、自由記載欄を設けた。

調査期間：平成17年8月18日～8月31日

対象者：栃木県内のA総合病院に勤務する看護職の女性既婚者、未婚者は問わず200名のうち、101名のデータを入力。今後もデータ入力の予定。

倫理的配慮：個人情報保護のもとづく、プライバシーや個人が特定されないような表記方法を行うこと、回答の自由を尊重し、回答する意思がない問いについては拒否する権利があること、およびそれによる不利益がないことを保障すること。またデータは研究の目的以外には使用されないこと、およびその後速やかに安全な方法で処分されることなどを明記した。

調査結果については、excelに入力し、SPSSにて統計処理を行った。

結果

今回の対象者の属性については以下の通りであった：年代：20～25歳27人（26.7%）26～30歳19人（18.9%）、31～35歳22人（21.8%）36～40歳10人（9.5%）、41～45歳10人（9.5%）、46～50歳4人（4%）、50歳以上8人（7.9%）

結婚：している51人（50.5%）、していない44人（43.6%）、していた4人（4%）

子供の有無：いる46人（45.5%）、いない48人（47.5%）

また、結婚年数は1年未満5名、1～5年未満11名、5～10年未満7名、10～20年未満14名20～30年未満11名、30年以上2名であった。

住居地環境については、農村25名、市街地16名、住宅地57名工業地、その他がそれぞれ1名であった。

出生地については、北関東（群馬、栃木、茨城）が最も多く、80名であり、東北地方7名、首都圏1名、それ以外が5名であった。

臨床経験については3年未満20人（20.8%）、3～5年10人（9.9%）、6～10年28人（27.7%）、10～20年27人（26.7%）、21年以上14人（13.9%）であった。

今回の調査では、出産育児を経験することをキーワードにしているため、子供の有無によってクロス集計をし、X2検定を行った。

1) 出産・育児経験のメリット

表1 出産・育児の経験があったらよいと思われることについて（複数回答）

カテゴリー	子どもあり	%	未婚・子ども無し	%
我慢強くなる	25	54.3*	8	16.7*
人の立場を考える	28	60.9*	11	22.9*
寛大になれる	19	41.3	12	25
自分のコントロールができる	15	32.6	7	14.6
気配りができる	16	34.8	8	16.7
友人が多くなる	17	37*	7	14.6*
夫婦の愛情が深まる	14	30.4	23	47.9
親の気持ちがわかる	38	82.6	38	79.2
社会に関心がもてる	20	43.5*	8	16.7*
社会的に信用を得る	9	19.6	10	20.8
責任感が強くなる	30	65.2*	21	43.8*
情緒の安定をもたらす	9	19.6	10	20.8
自信がつく	5	10.9	5	10.4
視野が広がる	20	43.5	12	25
経済観念がつく	10	21.7	9	18.8
楽しみがある	29	63	21	43.8
生活が充実する	13	28.3	17	35.4
常識的になる	13	28.3	6	12.5
生活に潤いがある	16	34.8	17	35.4
女らしくなる	3	6.5	6	12.5
豊かになる	9	19.6	8	16.7
役割が増える	22	47.8	26	54.2
その他	2	4.3	2	4.2

* P<0.05

表1が示す中で、子供あり群（出産育児の経験者）と子供なし群（未経験者）で比較すると、子供あり群のほうが有意に多かった項目として「我慢強い」「人の立場を考える」「友人が多くなる」などの項目が挙げられた。

表2 出産・育児の経験が仕事に良い影響を与えるとすればどのようなことか（複数回答）

カテゴリー	子どもあり	%	未婚・子ども無し	%
我慢強くなる	28	60.9**	13	27.1**
自信がつく	9	19.6	8	16.7
寛大になる	23	50*	13	27.1*
コントロールができる	14	30.4	8	16.7
ネットワークができる	11	23.9	6	12.5
度胸がつく	8	17.4	9	18.8
強くなれる	23	50	22	45.8
情緒が安定する	9	19.6	11	22.9
時間の効率を考える	26	56.5*	14	29.2*
話題が広い	17	37	12	25
常識的になる	16	34.8*	6	12.5*
経済効率を考える	10	21.7	13	27.1
仕事に意欲的になる	12	26.1	6	12.5
頑張れる	32	69.6*	21	43.8*
柔軟性がある	12	26.1*	5	10.4*
気配りができる	14	30.4	9	18.8
物腰が柔らかくなる	4	8.7	3	6.3
人に優しくなる	18	39.1	15	31.3
折り合いが強くなる	9	19.6	6	12.5
仕事以外の顔をもてる	15	32.6	14	29.2
その他	2	4.3	2	4.2

* P<0.05 **P<0.01

出産・育児の経験が仕事に対する影響については、表2が示す中でも表1と同様に子供あり群では「我慢強くなる」「寛大になる」など同様の項目が選択された。

出産・育児の経験がプラスになると思われる職業は看護師が最も多く、以下保育士、助産師の順に多かった。教育関係においては、保育士も含めて教育関係者では、大学教員が最も少なく、保育士が最も多く年齢が若くなる対象者の教育者ほど、出産・育児の経験がプラスに働くと考えられていた。

表3 出産・育児の経験がプラスになるとされる職業(複数回答)

カテゴリー	人	%
看護師	82	81.2
助産師	70	69.3
保健師	51	50.5
医師	36	35.6
小学校教諭	62	61.4
中学校教師	43	42.6
高校教師	36	35.6
大学教員	22	21.8
保育士・幼稚園教諭	78	77.2
接客業	28	27.7
営業	21	20.8
事務職	16	15.8
その他	6	5.9

2) 仕事が出産・育児に及ぼす影響

表4 仕事が出産・育児の経験に対してよい影響を与えるとすればどのようなことか。

カテゴリー	子どもあり	%	未婚・子ども無し	%
広い視野で子育てができる	9	19.6	12	25
関心が強くなりすぎない	4	8.7	6	12.5
小さなことにこだわらない	4	8.7	4	8.3
母親以外の顔を持てる	9	19.6	9	18.8
時間の使い方が上手になる	8	17.4	5	10.4
生活にメリハリがつく	4	8.7	7	14.6
頑張ろうという気持ちになる	17	37	16	33.3
その他	2	4.3	1	2.1

子供あり群と子供なし群での有意差はみられなかったが、「頑張ろうという気持ちになる」「広い視野で子育てができる」など双方ともに類似した傾向が見られた。

表5 勤労と出産・育児の関係について

カテゴリー	子どもあり	%	未婚・子ども無し	%
総じて仕事上のメリットがある	9	19.6	14	29.2
昇進、昇給には関係ない	1	2.2	3	6.3
職場の人間関係にメリットがある	6	13*	1	2.1*
対人的な職業にメリットがある	12	26.1	7	14.6
個人的で仕事に関係ない	7	15.2	6	12.5
仕事のメリットにはならない	3	6.5	2	4.2
仕事上デメリットの方が大きい	4	8.7*	17	35.4*
その他	2	4.3	0	0

* P<0.05

勤労と出産・育児の関係については、子供あり群では「職場の人間関係」にメリットがあると回答したものが、子どもなし群では「デメリット」が有意に多かった。

3) 仕事・自己実現について

表6 仕事で自己実現することについて

*ここでの自己実現とは、仕事上の実績やキャリアを積むこと、仕事を生き甲斐とすることなど。

カテゴリー	子どもあり	%	未婚・子ども無し	%
努力によって可能	15	32.6	17	35.4
子どもの年齢によって可能	2	4.3	3	6.3
周囲の協力によって可能	18	39.1	21	43.8
周囲の協力は関係ない	0	0	0	0
両立できることが大切	9	19.6	6	12.5
望まないほうがよい	1	2.2	1	2.1
その他	0	0	0	0

仕事で自己実現することについては、双方ともに「周囲の協力によって可能」と回答したものが最も多く、それに次ぐ回答の傾向が類似しており、有意差は

なかった。

表7 出産・育児経験がない人との比較

カテゴリー	子どもあり	%	未婚・子ども無し	%
仕事は負担である	3	6.5	6	12.5
仕事に限界がある	9	19.6	10	20.8
仕事に不利である	1	2.2	0	0
仕事の努力が必要である	7	15.2	8	16.7
周囲に気を使うことが多い	9	19.6	6	12.5
周囲の協力が大きい	15	32.6	16	33.3
変わらない	3	6.5	2	4.2
その他	1	2.2	0	0

有意差はみられなかった。「周囲の協力」「周囲に気をつかう」などの回答が双方に多かった。

表8 仕事において出産・育児の経験が評価されたら良いと思うことについて

カテゴリー	子どもあり	%	未婚・子ども無し	%
両立していること	12	26.1*	27	56.3*
経験から得たもの	11	23.9	8	16.7
親としての社会的責任	6	13	3	6.3
女性としての役割	3	6.5	1	2.1
人間的な成熟	11	23.9	5	10.4
その他	9	19.6	1	2.1

* P<0.05

出産・育児の経験の評価については、子供なし群においては半数以上が「両立していること」を選択し、子供なし群の方が有意に多かった。子供あり群は両立のほか、経験、人間的な成熟などばらつきがあった。

表9 評価の内容

カテゴリー	子どもあり	%	未婚・子ども無し	%
ねぎらいの言葉	3	6.5*	16	33.3*
経験を汲んだ役割を与える	9	19.6	12	25
自己評価でできれば良い	4	8.7	4	8.3
家族だけ分かれば良い	5	10.9	3	6.3
子育てが終われば関係ない	0	0	0	0
仕事には関係ない	0	0	2	4.2
職場では評価されなくて良い	2	4.3	2	4.2
理解を示されればよい	23	50*	8	16.7*
その他	0	0	0	0

* P<0.05

子供あり群の半数以上が「理解を示す」と回答しており、一方で子供なし群は「ねぎらいの言葉をかける」と回答したものが最も多く、有意差がみられた。

考 察

今回の調査では、結婚の有無、出産・育児経験の有無を問わず全ての勤労女性を対象者としたため、未婚者については想像、或いは自分が同じ立場にあるとき、望むことなどから、回答したものと推測した。

1) 出産・育児経験のメリット

概して対人的な項目が選択されていた。友人、社会など子育てをするうえで、周囲のネットワークを築いていく必要性からそれらの項目が選択されたものと思われる。そして責任感については、今回は何に対する責任かは問わなかったが、家族に対する責任をはじめとして周囲に対する責任は育児を経験する中で体得す

る機会がある。

また子供なし群のほうが子供あり群よりも多かった項目として、「夫婦の愛情が深まる」「生活の充実」などであり、有意差はみられなかった。子供あり群のほうが多く選択した項目は、子供を持ってきて経験するものである。子供なし群が「夫婦の愛情が深まる」「生活の充実」などを選択しているのは、期待されるべきもの、想像できるものなどで回答した可能性もある。今回の調査では、回答した理由は問わなかったため、回答した理由は推測にとどまることになる。いずれにせよ、対人的、社会的な項目についての回答であり、「女らしくなる」「豊かになる」など個人の充足についての項目を選択したものは少なかった。

2) 仕事への影響

「時間の効率を考える」「常識的になれる」「頑張れる」など実際に仕事に従事する中で実感できることと考えられる。逆に仕事が出産・育児にどのような影響を与えているかについては、双方間に有意差はなかったが、類似した項目に回答が集中していた。このことから今回の調査では育児経験者が実感できることと、未経験者が推察することに似たような傾向がみられたと考えられる。

また出産・育児の経験がプラスになる職業として、看護師が最も多かったのは、今回の調査では看護職を対象としており、看護職（看護師、助産師）として実際に従事する中で、出産・育児の経験はプラスになると回答したことが推測できる。今回の対象者は全員女性で看護職あるため、男性や別の職業で異なる回答になる可能性がある。

3) 仕事と出産・育児の関係

有意差が見られた項目として「職場の人間関係にメリットがある」と回答したものが多かった。概して、出産・育児の経験は私生活のことではあるが、家族が増えること、そしてそれに伴うネットワークや周囲の協力などが必須となるため、人間関係の調整について鍛錬される機会があることも要因であろう。

一方で「個人的なことなので仕事に関係ない」と回答したものもあり、子供なし群では「仕事上のデメリットのほうが大きい」と回答しているものが最も多く、有意差がみられた。未婚や子供がまだいない既婚女性においては、子供を持つことのデメリットを産む前から感じており、非婚化、少子化社会が反映していると思われる。

4) 仕事での自己実現

自己実現を仕事で図るにしても、周囲の協力はさる

ことながら本人の努力も必要とし、多大な労力を必要とすることが推察される。そして子供なし群と子供あり群が選択した項目に類似性があるため、子どもを持たない女性が推察することと、実際に子供を持った女性が実感していることは近いものであると考える。

仕事に限界があるとしたら、自分のために時間や労力を使うことが制約されることなどが考えられる。

5) 出産・育児の経験があることへの評価

子供なし群の女性から見れば「両立すること」など、物理的、時間的な均衡について評価できると考えているのであろうか。これから育児をする女性にとって、両立することが第一の目標になる可能性がある。

看護職では、不規則な勤務体制を経験することが多く、特に子供の年齢によっては家庭内の調整が必要となってくる。またこれらのことは心労にもつながることになり、何らかの理解が示されることを要求しているのかと思われる。今回は女性だけが対象であったため、出産・育児などのライフイベントの負担は、たとえ相手の男性が協力的であっても、女性の負担が大きいことが予想される。

その理由のひとつとして、根強い男女役割分業である。

今回は職業と出産・育児に焦点をあてたため、夫との役割分担については調査しなかった。男性がこれらのライフイベントによって、仕事の変更を強いられることはないのに対して、女性にとってライフイベントが職業生活に影響する背景にあるものは、根強い男女の性別役割意識によるものであることは様々な報告²⁾がある。このような背景があると、女性は結婚、出産を躊躇することも当然の成り行きであるといえる。結婚すれば、妊娠、出産、育児は自然の出来事になってくる。妊娠すれば必ず出産、育児が伴う。

そして子育てのキャリア形成への影響は、ニッセイ基礎研究所の調査によると、半数以上の勤労女性が「一時的なものでありその後のキャリア形成への影響は小さい」という回答をしていた³⁾。看護職の場合は業務経験が優遇される制度があることが多く、出産・育児がキャリア形成にマイナス因子を及ぼす可能性が小さいのではないかと考える。従って自己実現についても出産・育児の時期と並行しながら何らかの形で可能なのではないだろうか。しかし、それでも育児の負担は重い。

勤労女性の場合、特に対人的な職業に就く女性の場合、そのような家族を通じた人間関係の鍛錬などから、職場の人間関係の調整などにおいて、ライフイベントをクリアしたことがプラス因子になりうると考え

られる。

今回は2番目に挙げられていたが、助産師においては結婚～育児にいたるまでのライフイベントの経験は妊産婦、母親としての追体験として貴重である。

湯沢⁴⁾によれば「成熟した健康な男女が夫婦として子を生む能力をもっており、子をもち養育することは経済的にも、労力的にも時間的にも大きな負担ではあるが、同時にその自己犠牲は、子をもたない人間では経験できない豊かな人間性を形成する」といわれており、子をもつことの利点は、具体的にはにぎやかな共生感情を充足し、夫婦だけでは補えない家庭的情緒を生み、弱小なものを庇護したいという親らしい感情を満ちし、未完成の若々しい力の存在を実感し、異世代との社会交渉で社会関係が拡大され、更には老後のよき話し相手や親身の世話が期待できるといったことがあげられている。また躰をすることにより、家庭内の教育力を養うことも鍛錬されることである。これらの根本にあるものは、時代が変化しても普遍的なものとしてとらえることができる。

したがって、「保護をする」「教育をする」といった看護者には必要なスキルが、子供を持つことによって身につくのではないだろうか。そして親自身も成長するという見解から考えると、特に対人的なスキルや本人の充足感などが仕事にプラスになるものと仮定できる。そして出産・育児の経験で得た自分自身の成長は、直接的に昇進、昇格などをもたらすものではないが、勤労女性にとって表面には出ない生活の潤いなどから豊かになり、充足感を感じることで明日の活力になるのではないだろうか。

結 論

1. 出産・育児経験者の看護職では、出産・育児のメ

リットとして、対人的な要素について認めていた。

2. 出産・育児経験がプラスに働く職業として、看護職を選択し教育職では年齢が若い者を対象とする教育者ほど多く選択されていた。
4. 仕事における自己実現については、出産・育児経験者、未経験者ともに周囲の協力、努力などを挙げていた。
5. 仕事における理解については、出産・育児経験者は「理解されること」であり、未経験者は「ねぎらうこと」が望ましいと考えていた。

終わりに

今回の調査は、データ処理が途上にあるため今後結果が変わる可能性がある。そして質問項目については、信頼性が認められた尺度がないため、今後開発の余地があり、それが今回の研究の限界となった。

最後にこの調査にご協力くださいました栃木県のA病院の看護部長、及び看護職の皆様へ深謝いたします。

引用文献

- 1) 日本婦人団体連合会編：女性白書～世界の流れと日本の女性。ほるぷ出版（東京），2004.
- 2) 彭潤希，佐藤龍三郎，福渡 靖：未婚女性の結婚・出産・育児・介護および就業に関する意識。厚生指標，26-32，2001.
- 3) ニッセイ基礎研究所：データで見る少子化ベリネイタルケア。18 (2)，1999.
- 4) 湯沢雍彦著，稲垣長典，谷田関次ら監修：お茶の水女子大学 家政学講座 家族関係学。光生館（東京），71，1969.